

Title	少子化時代の中の大学共同体形成の舵取りのために：聖学院大学二〇〇七年新年度初頭教書
Author(s)	阿久戸, 光晴
Citation	キリスト教と諸学：論集, Volume23, 2008.3：170-82
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4524
Rights	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

少子化時代の中の大学共同体形成の舵取りのために

— 聖学院大学二〇〇七年新年度初頭教書 —

阿久戸 光 晴

一、私大連でのシンポジウムをとおして

私は、本年一月私立大学連盟の第二回学長会議で、京都大学前副学長・青山学院大学前学長とともに、「私立大学のガバナンスと学長が果たすべき役割」の題のもとにシンポジストとして議論をしてまいりました。私は次のように展開しました。なぜ大学改革か（逆風の存在の認識）、それは護送船団方式を維持し得なくなった今日の日本経済の国際比較での相対的体力低下の問題があること、しかも冷戦崩壊後の日本の国際政治的位置の相対化の問題があること、さらに一般国民の意識転換が追いついていない問題があることを述べました。特に近年の大学改革にはその背後に、かつてのような「国家主導型社会発展の限界」と「民間団体の活性化による社会発展の時代」という「時のしるし」があることを強調しました。この現実の中で私大はどのような道を行くべきなのでしょうか。

私は私学、私大には強みがある、そのことを福沢諭吉翁はご存知であられたと、述べました。翁は私学の創意工夫が必ずや管理に服する国公立学校よりも、固有の教育理想の実現という点で、力を発揮する時代が来ることを予

言っております。その温故知新を想い起こそうと申しました。そこで、発題として具体的には次のように展開しました。

物事を創造し達成するには、明確な理念、達成目的の構成員による自覚と共有が必要であること、その場合特に創設理念を創設時に終わらせてはいけない、その理念の持続と形成課題が問われると、申しました。これは創造論に並行します。神は万物を創造されて、その後自然的機械的因果律に委ねられたか。決してそうではなく、神の創造のご意思の良き理解者たちによって創造から形成の段階へ至るのであります。それと同じように、私立大学も建学の理念に基づき開学からその理念に基づき形成の段階に入るはずであります。

次に、航路を知る「海図」と時代の風を読解する「風見」と目的地へ至れる「羅針盤」と順風はもちろん逆風をも前進に利用できる「操帆技術」が必要であります。海図は歴史理解、特に近現代の意味の理解を意味します。風見は海図に照らして時代の本質を見抜くことを意味します。羅針盤はそうした時代の風の中の自己組織の位置確認を意味します。そしてそれら目的地へ目指すための時代と自己存在の確認をしたうえで、実際に船をどう進めるか、乗組員が嫌気を抱えずやりがいを持つて前進への力強い貢献ができるための組織活性化論になります。最後に、私はこれらをガバナンスと言うべきでありました。ちなみに、ガバナンスとはもともと聖書の用語で、使徒行伝二七章などに出てくるギリシャ語クベルナオーの名詞形クベルネーシスに由来します。それがラテン語を経て英語化しました。ガバナンスとは舵取りの課題にほかなりません。独立行政法人大学への行政府指針は、教授会の権限削減と学長への中央集権化のようですが、私は学長はサーヴァントリーダーであり、オーケストラのコンダクターの役割であると断言しました。それは構成員全員参画化による組織の活力集団化が目指されるべきであるとしてました。

以上を述べて、私大がやがて強みを發揮できるための強力な橋頭堡として、日本国憲法第二一条の「結社の自由」がある、これは原文の英語文では "freedom of . . . association," となっており、これは民営会社（国営会社でなく）や自由教会（国教会や国家神道でなく）や私立学校（国公立学校でなく）などの活躍の自由を意味すると申しました。これが私学發展の根柢となろうと閉じました。

国公立大学から私学へ着任された学長の一部からの反論はあつたものの、内容的に目立つた反論はありませんでした。いずれにせよ、聖学院大学としては、私たちの出自の強みと存在確認をしたうえで私大の良さをともに發揮していきたいと思ひます。本年度の新入生は、心に悩みを抱えた仲間も多いかもしれませんが、本学で本当に自己脱皮できることを期待し、その意味で真摯な者が多いと見受けます。これは感謝すべきことではないでしょうか。逆風のときこそ乗組員は団結するものです。しかしこうした希望の芽が見えております。この芽を伸ばすべく、ぜひ一緒に船を進めようではないでしょうか。

二、具体的課題

(一) キリスト教センターについては、本年からしばらく空席であつた大学チャブレンに、阿部先生がご着任くださいました。上記の理念の浸透を図るためにも、大学チャブレンにご協力いただきたい。本学は明確な建学の理念をもとに形成されてきている教育・研究共同体です。全学礼拝は大学のすべての営みの原点であります。学長・学部長・チャブレンを先頭に、毎日の礼拝への出席を励行しましょう。

また大学競争に勝ち抜くためには、適宜の設備投資が必要となります。まずは積み残しのパイプオルガンの

設置を完遂しましょう。後援会・同窓会はもとより、短大関係グループ・緑聖教会・聖学院みどり幼稚園との協力をより堅固にし、何としても達成しましょう。

(二) 教務部におかれては、引き続き退学者対策が必要です。ラーニングセンターや学生相談室とのタイアップのもとに、また入学段階でのクラスアドヴァイザー制度の活性化をさせつつ、ぜひ全学的に取り組んでいたきたい。学生の学習意欲の向上のために、現在FD委員会が種々の検討、授業改善のための方策を練っている。ただいておりますが、今年度さらにこれを推進し、文字どおり全学的運動へ進めましょう。

また昨年度から引き続き、学生の種々の可能性を大いに伸ばす方策を進めておりますが、これをさらに各学科で具体的学生に合わせ指導目標を立てて、進めていただきたい。昨年度は人間福祉学科で社会福祉士の国家試験合格が現役生で合格率全国一位を勝ち取りましたが、これを今年度も続けることと、またほかの資格面でも開拓指導していただきたい。また児童学科で小学校教職の合格面での好成績、欧米文化学科での英語力の劇的向上を目指しましょう。

GPA制度の教育的活用もさらに進めていきたいと思います。またコンピュータ委員会と情報システム課による学生の履修登録のオンライン化などの効率化は必須の課題です。

(三) 学生部におかれては、何よりも学生クラブの活性化です。幸い、陸上部、聖学院大学フィルハーモニー管弦楽団などをはじめとして、多くの発展の芽が出ております。何とか育ててまいりましょう。

また学資の問題で中途退学する学生がおります。学生部として、意欲ある学生を支えるため、奨学金の拡充や緊急貸付制度の検討や、それらの応募資格条件の緩和をご検討ください。早期退学を表明する学生には、近年種々のメンタルな課題を持っていることがあります。今後この点での学生相談室の役割やラーニングセ

ンターの役割はますます重要を帯びることになります。さらに総合研究所カウンセリング研究センターとのタイアップを視野に置いていただきたい。

また人権情報保護委員会におかれては、社会的な情報保護の認識の高まりに応じた教職員および学生の私的情報管理保護を目指していただくとともに、新年度もセクシユアル・ハラスメント防止の啓蒙活動を推進してまいります。セクシユアル・ハラスメントは本学においては、絶対にあつてはならないことです。意図的な場合は問題外ですが、認識不測から来る種々の問題がないように、ご指導を願いたい。

(四) 広報部におかれては、今年度いよいよ正念場を迎えます。各高等学校との関係強化、塾や専門学校をも視野に入れた訪問説明、非漢字圏の南アジア留学生の開拓、また帰国子女を迎えるための対策をとるに推進しましょう。またクリスチャン入試のさらなる開拓や本学の教育理念に共鳴する求道者をいかに迎え入れるか、一定の学力のあるスポーツに特技ある者をどのように迎え入れるか、種々前向きに進めましょう。さらに入学前準備教育の更なる推進、社会人入学、編入の推進を視野に入れて、全学的取り組みにしたいと存じます。小学校教職資格を児童学科で取得できましたが、他の教育系大学も資格取得となり、この分野での過当競争が進むと思われまゝ。魅力ある広報上の方策を立てるとともに、児童学科との密接な協力体制が必要です。また昨年度末に人間福祉学科社会福祉士の現役合格率が全国第一位になるというすばらしい達成がありました。このことに関わられたすべての学科の先生方に敬意を表するとともに、この達成を広報上、大いに用いて行こうではないでしょうか。

(五) 就職部におかれては、キャリアサポートセンターとともに、さらなる就職率の向上に取り組んでいきましょう。新入生段階で、「生きる意味、働く目的」ならびにキャリア・デザインを各自が立てられるよう、ご指導

願いたい。センター指導の在学生のインターンシップ活動には、相変わらず目覚ましいものがあります。在学の先輩たちに良き刺激を与えていただけると、推進していただきたい。

生涯学習センターについては、本学の卒業生育成対策の一環として強化が必要な項目であり、SLIをはじめとして、駒込キャンパスとの調整を含め、今年度も発展を期しましょう。近年の労働環境の深刻化から、終身雇用が完全に崩れました。したがって、データに現れにくいですが、キャリア・デザイン指導は、在学生だけでなく、卒業生にまで及ばせる緊急の必要性があります。

(六) 国際部は、国際センターとともに、今年度特に増加した中央アジア、南アジア等の非漢字圏の留学生ケアが必要です。学生部とタイアップして対処を願います。さらに、日本語リカレント教育の全面的見直しが必要です。これは基礎総合教育部とも協力して対処が必要です。韓国との提携大学との交流も、ますます厳しくなる入国審査、入国後の違法労働の禁止等、種々の難問が残されており、慎重な判断が問われ続けるでしょう。

また本学生の海外留学生を増やすとともに、海外でのキリスト教文化経験を積ませるといふ観点をお忘れぬよう、ご指導を願います。

(七) その他各委員会のうち、点検評価委員会は今年度は特に「第三者評価」の実施年度です。点検評価実行委員会のご貢献を願うとともに、全学的取り組みが必須です。さらに、大学院・総合研究所を含む総点検を受けねばなりません。そのことの啓蒙とスケジュール管理を伴う対応を心がけましょう。関係者のご協力を特に願います。

(八) AH（アッセンブリアワー）は、本来全学・学部学科の教育理念に学生を触れさせる貴重な時間帯です。近

年それだけでなく、各学部・学科の個性あふれる価値ある諸活動が活発になされていることは喜ばしいことであります。これを単なるイヴェントにせず、具体的教育的成果に結びつける努力を委員会はもとより、各学科でも取り組みを願います。

(九) 総合図書館は、図書の電子管理、また電子書籍のさらなる活用の検討の継続をお願いいたします。今年度は論叢の強化とともに、大学研究叢書をもう一度活性化させる年度としたいと存じます。教育に労力が取られがちな時節ですが、やはり研究の高揚という私たちの本分を忘れぬよう、ともに努めましょう。

(十) 基礎総合教育部は、今年度にいよいよ新「総合科目」がスタートします。「潜在的に持てる力を伸ばせる学生は伸ばす」ことの合言葉のとおり、この科目はGPA三・〇以上の学生を少数精鋭で、大学院レベルで指導する計画です。ぜひ生かしていただきたい。

また基礎総合教育部と語学教育委員会との密接な協力のもとに、本学が「英語の聖学院大学」と社会的評価をいただけるように、現在の学生の現実にあった学力向上プログラムをもう一度検討する年度としたいと存じます。このため、特に欧米文化学科で推進中の英語特別教育計画の二年目の年となりますが、基礎総合教育部の強力なご支援を願います。

また増大する留学生への専門教育のため、日本語教育をさらに多様な指導方法を導入しつつ、強化してまいります。

三、最後に

最後に、少子化時代に入り、従来とは異なつた種々の教育的課題を本学は受け止めることが社会的に期待されま
す。しかし少子化は、オンリー・ワン・フォー・アザーズの教育目標を掲げる本学にとつて、好機到来でもありま
す。本学は、巷間「面倒見の良い大学・入って伸びる大学」と言われておりますが、それは決してボトムアップに
取り組むだけでなく、「伸びる学生を伸ばす大学」でもあります。本年度、本学は各学部各学科で、「ボトムアップ
30」計画とともに、「トップ10・トップ30」計画を目指し、学科の個性を生かしつつ、多様にして、等しく教職員も
学生も「人格の完成」を目指す大学共同体でありたいと念願しております。ともに歩みましょう。

二〇〇七年四月一八日